Alt. ca. 100–200 m. 新しく造成された道路の法面に生育. 10 Oct. 2000. 小川誠 07458 (TUS 277304, TKPM 44795).

引用文献

中国科学院植物研究所. 1972. 中国高等植物図鑑 **2.** 科学出版社, 北京.
中国科学院中国植物志編集委員会. 1995. 中国植物志**41**. 科学出版社, 北京.
Iokawa Y. and Ohashi H. 2002. A taxonomic study of the genus *Campylotropis* (Leguminosae). J. Jpn. Bot. **77**: 179–222, 251–283.
大橋広好 2002. 分類学私考. 分類 **2**: 65–73.
大橋広好, 根本智行, 伊藤隆之 2003. ハギ属の帰化植物 4 種. 植物研究雑誌 **78**: 50–54.
山中二男 1978. 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 高知.

([a]東北大学大学院理学研究科附属植物園津田記念館
[b]東北大学大学院理学研究科附属八甲田山植物実験所
[c]徳島県立博物館)

山形県で見出されたヤブマオモドキ (大場秀章)

Hideaki OHBA: On *Boehmeria tikusiensis* Satake in Yamagata Prefecture, Northern Honshu (Notulae ad plantas Japoniae 10)

日本海に面した山形県は, いわゆる日本海要素とよばれる植物が多く分布する. 結城嘉美氏はじめ多くの地元の方々によってその植物相が調べられてきたが, まだ十分ではないようだ. 最近, 加藤信英氏は数多くの興味ある植物を見出され, 私に研究の機会を与えてくださった. 2000年には集められた多数のヤブマオ属植物を検討することができた. 日本のヤブマオ属相は1930年代になって佐竹義輔により検討が加えられたが, 山形県をはじめ, 本州北部日本海側の同属植物については, その後包括的な研究はなされていない.

ヤブマオ属では異種との間の遺伝的隔離がゆるく, 雑種を形成し, 無融合生殖や栄養繁殖などで集団を広げていくことが指摘されている (矢原 1993a). こうした植物のあり方は, 有性生殖をする植物と基本的に異なるものであるが, このような植物を分類学上どのように扱うかについてはいまのところ定説がない.

矢原が進めたような解析が, 日本のヤブマオ属植物の研究を進めるうえで重要であるが, 本州日本海側地域のヤブマオ属については佐竹 (1936) によって形態学上の相違にもとづいて識別されてきた種のうち, どの種が産するのかさえ現段階では十分には掌握されていない. 今後の一層の解析的研究への情報提供として, *Boehmeria tikusiensis* Satake (ヤブマオモドキ) が山形県に産することを報告する.

ヤブマオモドキは, 佐竹 (1938) により筑前南畑村 (現, 那珂川町) (中島和男 no. 6, 1937年, これがホロタイプである), 同多々羅村 (初島住彦 no. 7, 1937年), 大隈佐多村 (村松七郎 no. 6, 1936年) で採集された標本にもとづいて記載された. 佐竹によれば, その特徴は痩果はナガバヤブマオに近いが, 葉はヤブマオに似ていることである. 佐竹のヤブマオ属の分類体系では, 痩果の形質に重きが置かれており, 本種も "この意味ではナガバヤブマオであるが, 葉は厚く, 且表面は稍粗華, 下面に短毛が生ずるので区別される" として, 新種として記載された. しかし, それ以後本種についての言及はなされてこなかったが, 矢原 (1993b) は本種がナガバヤブマオの鋸歯が粗い型であり, ナガバヤブマオとは区別できない, としている.

さて, 山形県で採集された植物は生きた状態でも標本でも, ヤブマオモドキから区別できない (Fig. 1). 山形県にはナガバヤブマオも分布しているが, 両者は明瞭に区別できる. すなわち, この両者は葉の質が異なるほか, 葉裏の中肋上や主要な側脈上に生える毛の様態が異なる. ナガバヤブマオの毛は針状で先端に向けて脈上に圧着しているが, ここでヤブマオモドキとする植物のそれは 2 種類ある. ひとつはナガバヤブマオ同様の針状圧着毛であるが, 他はそれよりも多少長くかつ湾曲し, 斜上する. 同様の毛は九州で採集されたヤブ

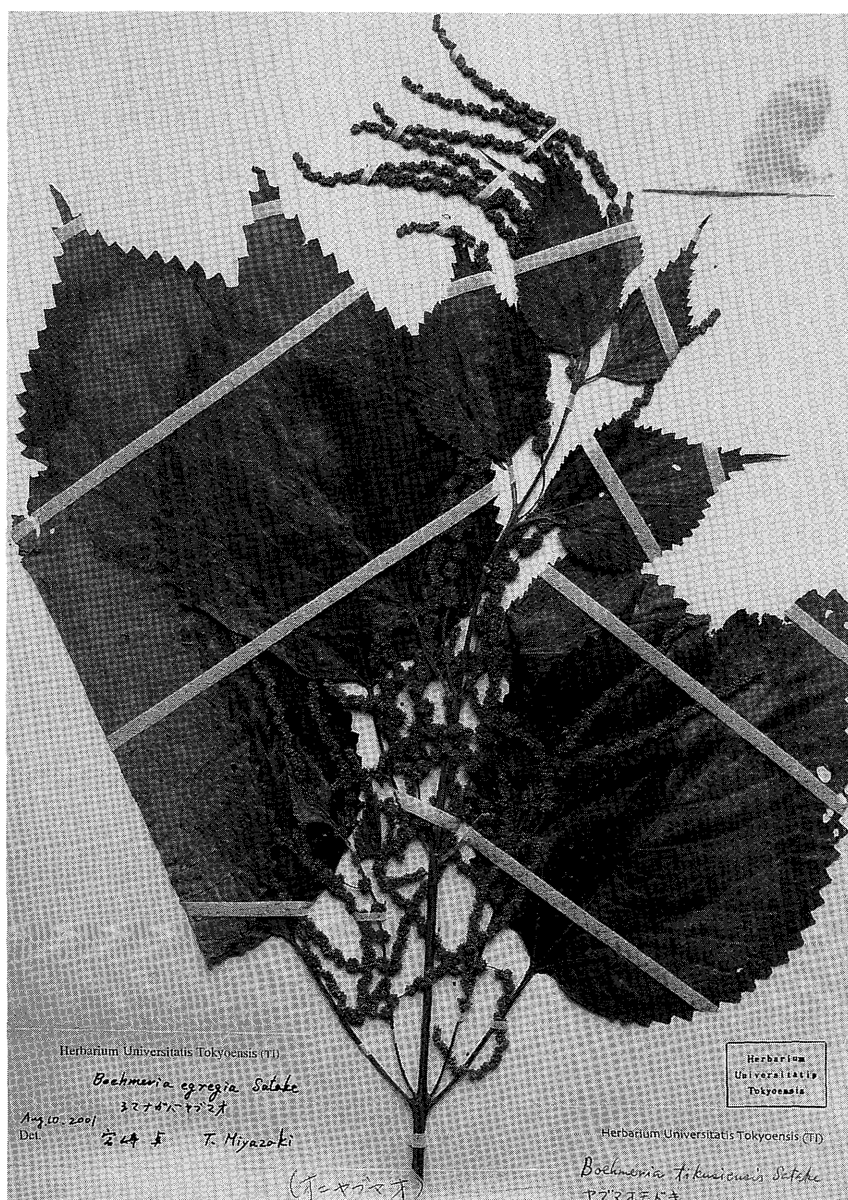


Fig. 1. *Boehmeria tikusiensis* Satake collected from Yamagata Pref. (Tsuruoka-shi, Kamo-kaigan, 14 Sept. 2000, Shin'ei Kato no. 3, TI).

マオモドキの標本（上記のうち，初島 no. 6）にもある（ヤブマオモドキのタイプは東大にあるが，現在この属のモノグラフ作成が進行中であり，国外に貸し出されているため，参照できないのが残念である）.

佐竹はヤブマオモドキについて，痩果上の毛の分布と密度はナガバヤブマオと同様と書いた．しかし，ナガバヤブマオでは上部のみに毛がまばらに生えるのみであるのに対して，ヤブマオモドキに当たる山形県産の植物のそ

れは，毛は瘦果の上部から中部にかけて存在する．ただし，佐竹がヤブマオモドキとした初島の標本には生殖器官がなく，瘦果の状態を調べることができなかったが，後に奈良県で採集され，佐竹によりヤブマオモドキとされた標本（磯城郡「現，桜井市」初瀬，村田保太郎 no. 9，1938年7月14日）では，瘦果の毛の分布状況は山形県のそれと一致する．これらのことから，山形県には佐竹により記載されたヤブマオモドキと区別できない植物が分布するということができる．

ヤブマオモドキは佐竹も指摘するように，形態学上はナガバヤブマオとヤブマオの雑種由来であると考えることができる．佐竹はヤブマオモドキの記載で雄花は不明と書いている．山形県で採集された標本でも雄花は見出せない．

なお，矢原（1993b）は，ツクシヤブマオ *B. kiusiana* Satake をナガバヤブマオとヤブマオの雑種起源と考えられる無融合生殖型としている．しかし，佐竹によって同定されたツクシヤブマオの標本を検討する限り，それはむしろサイカイヤブマオ（ニオウヤブマオ）とナガバヤブマオあるいはオニヤブマオとナガバヤブマオの雑種に由来するものであると考えられる．今後の検討が必要であろう．ツクシヤブマオに類似するヤブマオは，九州のほか，朝鮮半島南部にも見られる．これらは，佐竹によって別種として分類されているが，それらの異同についてはここではふれない．

本州の日本海側では秋田県にラセイタソウが産することになっている．この自生地や標本をまだ検討していないが，事実とすると，ラセイタソウとナガバヤブマオの雑種由来と考えられるシマナガバヤブマオ *B. egregia* Satake がこの地域から見出される可能性もあると考えてよい．シマナガバヤブマオについて，Satake（1936）はその雄花が3数性とし，他の類似植物から区別したが，よく検討してみると4数性の花も混ざる．数性だけでシマナガバヤブマオを区別することはできない．シマナガバヤブマオも外形上はヤブマオモドキに類似しており，その正体については検討が必要であろう．

本研究の機会を与えてくださった，加藤信英氏に感謝の意を表したい．また，ご助言をいただいた宮崎　卓氏にもお礼申し上げる．

Recently Mr. Shin'ei Kato found *Boehmeria tikusiensis* Satake in Yamagata Prefecture, N. Honshu facing the Japan Sea side, where the plants grow exposed waste ground by the sea-coast. This is the new record of this species from northern Japan.

Boehmeria tikusiensis, which was described from Fukuoka Pref., northern Kyushu and later reported to occur in Nara Pref., central Honshu, differs from *B. sieboldiana* Blume by the achenes with sparse hairs on the apical half and also by the lower surface of leaves with both bent-ascending hairs and appressed, needle like simple hairs on the midvein and main lateral veinlets. *Boehmeria sieboldiana* has achenes with hairs only on apical part and the lower surface of leaves with needle-like appressed hairs on the midvein and main lateral veinlets.

Boehmeria tikusiensis collected in Yamagata Pref. has no male flowers. Satake (1938) wrote that the presence of male flower is uncertain in *B. tikusiensis*.

Boehmeria tikusiensis Satake in J. Jap. Bot. **14**: 510 (1938).

Type: Japan. Kyushu. Prov. Tikuzen (= Chikuzen) [Fukuoka Pref.]: in oppido Minamihatamura (K. Nakasima no. 6 in Sept. 1937, TI).

Specimens newly collected. Japan. N. Honshu. Yamagata Pref.: Nishi-tagawa-gun, Atsumi-machi, Ooiwagawa-kaigan (Shin'ei Kato no. 6, 13 Sept. 2000, TI); loc. cit., Nezugaseki-kaigan (Shin'ei Kato no. 5, 13 Sept. 2000, TI); Tsuruoka-shi, Ko-nami-watashi-kaigan (Shin'ei Kato no. 1, 13 Sept. 2000, TI); Tsuruoka-shi, Kamo-kaigan (Shin'ei Kato no. 3, 14 Sept. 2000, TI).

参考文献

Satake Y. 1936. Boehmeria Japonica. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. III, **4**: 467–542.

佐竹義輔．1938．九州産やぶまを属ノ種類（*Boehmeria* species of Kyusyu）．J. Jap. Bot. **14**: 508–514.

矢原徹一．1993a. 福岡県産ヤブマオノート．福岡県植物研究会編，福岡県植物目録 第2巻，63–64 pp.
—— 1993b. 矢原メモ．矢原徹一，筒井貞雄，イラクサ科 Urticaceae. 福岡県植物研究会編，福岡県植物目録 第2巻, 62–88 pp.

（東京大学総合研究博物館）

Kwang Hee MOON[a] and Hiroyuki KASHIWADANI[b]: **Materials for the Distribution of Lichens in Japan (12)**

地衣類分布資料（12）（文 光喜[a]，柏谷博之[b]）

Myelochroa metarevoluta is one of the well-known lichens that shows a disjunctive distribution in eastern Asia and eastern North America (Hale 1976, Kurokawa and Arakawa 1997, Moon 1999). Although it is rather common in Hokkaido, Honshu and Shikoku in Japan, elsewhere in Asia it is known only from North-Eastern China (Kurokawa and Arakawa 1997) and Mt. Sorak, Kangwon Prov., Korea (Moon 1999) during preparation of a database of Faurie's collection of lichens kept in KYO, we found a specimen of *M. metarevoluta*. The specimen has been kept under the name of *Pseudophyscia hypoleuca* (Müll.Arg.) Hue. However, it has capitate soralia composed of farinose soredia and contains secalonic acid A and galbinic acid as chemical ingredients. Thus it is readily identified as *M. metarevoluta*. This is a new record of the species for Taiwan and is the southernmost locality for the species (Fig. 1).

Specimen examined. Taiwan. Taitüm (Taichun), May 7, 1903, U. Faurie 10 (KYO).

Literature cited

Hale M. E. 1976. A monograph of the lichen genus *Parmelina* Hale (Parmeliaceae). Smiths. Contr. Bot. **33**: 1–60.
Kurokawa S. and Arakawa S. 1997. Revision of Japanese species of *Myelochroa* (Parmeliaceae). Bull. Bot. Gard. Toyama **2**: 23–43.
Moon K. H. 1999. Lichens of Mt. Sorak in Korea. J. Hattori Bot. Lab. **86**:187–220.

コフキチョロギウメノキゴケ *Myelochroa metarevoluta* は，東アジアと北東アメリカに隔離分布することが知られており，日本では北海道から四国に産する．日本以外のアジア地域からの報告としては，中国（満州）と韓国（江源道雪嶽山）のわずか二か所があるだけである．筆者等は，最近京都大学総合博物館に保管されている Faurie 氏の標本のデータベース化の作業を続けているが，その作業中に *Pseudophyscia hypoleuca* (Müll. Arg.) Hue と同定されている標本を見つけた．この標本は明らかにウチキウメノキゴケ属のもので，頭状の粉芽を持ち，地衣成分としてセカロニン酸 A とガルビン酸を含むので *M. metarevoluta* と同定される．これは本種の台湾からの初めての報告であり，分布の南限にあたる（Fig. 1）.

（[a]淑明女子大学 自然科学研究所
韓国ソウル特別市龍山区清波洞 2–53–12,
[b]国立科学博物館植物研究部）